

研究報告

中国語を母語とする日本語学習者の日本での日本語学習上及び生活上の問題点、困難点についての事例研究（Ⅱ）

藤 田 昌 志

关于以汉语为母语的日语学习者在日本的生活上和
日语学习上的问题和困难的事例研究（Ⅱ）

TENGTIAN Changzhi

〈提綱〉

筆者以前关于在三重大学学习日语和专业的中国留学生在日语学习上的问题和生活上的困难做过事例研究（Ⅰ）。这个事例研究（Ⅱ）是接上次事例研究（Ⅰ）做的。它是以日语初级集中A和日语初级集中B的修习者为对象的，跟事例研究（Ⅰ）比较起来有一点区别，就是说，事例研究（Ⅱ）比事例研究（Ⅰ）的对象范围更加缩小。（事例研究（Ⅰ）的对象范围不只限于初级集中A、B的修习者，更加广泛。）

三重大学在册中国留学生大部分是私费留学生。他们大多数首先学好日语之后，学好专业再报考大学院の考试。这个期间是两年。他们还有一个特点：就是他们一边学习一边要打工。学习和打工如车之两轮。（虽然他们大概想专心学习。）

这次事例研究（Ⅱ）的对象者基本都有机会跟日本人对话（至少一个星期有一次）。这是由指导教授、留学生专门教育担当教官、留学生中心教官所提供的。别的调查结果显示：最大的问题还是金钱。

一、序

三重大学学務部留学生課の調べでは、平成14年1月1日現在、三重大学にいる留学生の総数は、242名（うち、男性136名、女性106名）で、そのうち、中国人留学生の総数は146名（うち、男性74名、女性72名）である。留学生総数の60%が中国人留学生であることになる。「中国語を母語とする日本語学習者の日本での日本語学習上及び生活上の問題点、困難点についての事例研究（Ⅰ）」⁽¹⁾で述べたように彼ら中国人留学生の多くは中国において大学を卒業しており、その上で更に、三重大学に留学し、大学院に進学しようとする。

二年間の研究生の期間に、最初に日本語を習得し、それから大学院合格のための専門の勉強をするのが一般的なケースである。

本事例研究（Ⅱ）は、上記のような特徴を持つ中国人留学生の「日本語学習上及び生活

上の問題点、困難点」について実態を明らかにするために執り行われたものである。前回の事例研究（Ⅰ）は、Ⅰ．初級集中 B（日本語研修 B コース）（＝日本語を 100 時間程度既習した者が更に学習し、日本語の基礎を身につけ、更に基礎を復習し、発展させるコース）⁽²⁾（Ⅰ－㉗、Ⅰ－㉘、Ⅰ－㉙、Ⅰ－㉚）Ⅱ．「大学教育を受けるために必要な基本的な読解力及び聴解力、文章表現力」⁽³⁾をある程度身につけた、三重大学留学生センターで行っている日本語レベル判定試験に準じて言えば、中級Ⅰ終了レベルの日本語能力を持っている私費留学生の個別事例、Ⅲ．「大学教育を受けるためのより高度な読解力及び聴解力・文章表現力の育成」⁽⁴⁾を到達目標とする中級Ⅱ（三重大学留学生センターの日本語レベル判定試験での日本語レベルのコース）の中国人留学生の個別事例（Ⅲ－㉗、Ⅲ－㉘）Ⅳ．「専門分野で研究を行うために必要な高度な日本語力の養成」⁽⁵⁾を到達目標とする上級コース（三重大学留学生センターの日本語レベル判定試験での日本語レベルのコース）の中国人留学生の個別事例（Ⅳ－㉗、Ⅳ－㉘）の合計 9 つのケースについて執り行われたものである。

その後を継ぐ本事例研究（Ⅱ）は、Ⅰ－A 日本語集中コース A クラス＝全くの日本語未習者（国費留学生（大使館推薦または教員研修留学生）並びに指導教官が推薦した私費の研究生）を対象とし、約 15 週日本語の授業を行うコース⁽⁶⁾（Ⅰ－A－㉗、Ⅰ－A－㉘、Ⅰ－A－㉙、Ⅰ－A－㉚）Ⅰ－B 日本語集中コース B クラス（Ⅰ－B－㉗、Ⅰ－B－㉘、Ⅰ－B－㉙、Ⅰ－B－㉚）の個別事例 8 ケースについて執り行われたものである。日本語集中コース A クラスは、既述のように全くの日本語未習者を対象としたコースで今回の対象者には 1999 年 10 月 12 日～2000 年 3 月 1 日まで日本語の授業を行ったのに対し、同 B クラスは 100 時間程度の既習者を対象とし、同期間、日本語の授業が行われたが、本事例研究（Ⅱ）が日本語学習における初級終了者（＝日本語集中コース A クラス、B クラス終了者）を対象として執り行われたものであることは明確にしておきたい。

事例研究（Ⅰ）に比べて本事例研究（Ⅱ）の方がその対象を初級終了者にしぼりこんでいるのである。筆者が中国語を解するところから、必要な場合には中国語を使用してインタビューを行った。ラポール（信頼関係）確立のために有効な手段であると認識したのは事例研究（Ⅰ）と同じである。

二、個別事例と個別的考察

以下、Ⅰ－A 日本語集中コース A クラス（Ⅰ－A－㉗、Ⅰ－A－㉘、Ⅰ－A－㉙、Ⅰ－A－㉚）Ⅰ－B 日本語集中コース B クラス（Ⅰ－B－㉗、Ⅰ－B－㉘、Ⅰ－B－㉙、Ⅰ－B－㉚）二つのコースの個別事例についてインタビュー結果と考察を記述していくことにする。

個別事例Ⅰ－A

個別事例Ⅰ－A－㊦

このケースの被インタビュー者を仮に A1 さん（女性、31 歳、私費留学生）とする。A1 さんに対するインタビュー調査は 2000 年 3 月 7 日の午後 2 時半から 3 時半まで行われた。A1 さんは 1999 年 10 月 9 日に鎮江市から来日し、人文学部の研究生となっている。専門は日本文学である。日本語集中コース A クラス（1999 年 10 月 12 日～2000 年 3 月 1 日既述）に参加した。（以下の㊦㊧㊨のインタビュー対象者も同じ。）次に、インタビュー調査のシートの順にしたがって、主要な結果を記述していくことにする（以下同じ）。

〔調査結果〕

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音では促音と長音のちがいがわかりにくい（例：国会／後悔）。人間関係（日本語を話す場の有無等）については、人文学部の留学生専門教育担当教官である早矢仕先生の紹介による日本語ボランティアと、水・木の 2 日間各 1 時間、日本語を話す場がある。

②生活上の問題点、困難点について。生活費は 1 ヶ月に 8～10 万位かかる。アパート代（電気、ガス代等含む）は、28,000 円かかる。御主人のアルバイト（火・木）と中国から持ってきた貯金を生活費にあてている。A1 さん本人のアルバイトとしては、食品を陳列する仕事を週 10 時間している。1 時間 700 円の手取りで週 10 時間×4 週で 28,000 円の収入となっている。人間関係について。ア. 困ったときに相談する相手は主人である。イ. 日本人との関係（知り合いの有無・知り合いとの関係の良好度）では、A1 さんのおじさん（中国人）の結婚相手が日本人（中国残留孤児）で、1 ヶ月に 1 回位電話するとのことであった。ウ. その他としては、“因为现在日语不好，有时表达的意思与日本人理解的不一样。”（「今、日本語がまだヘタなので、言っていることが日本人に伝わらないことがある。」）とのことであった。文化的摩擦（日本と中国の文化、習慣上の相違／日本で困ったことの具体例）については、摩擦というほどではないが“到日本人家里做客，基本上都带礼物，而回来时，主人也赠送礼物，在中国就不一定这样做。”（「日本人のところへ行くとき、基本的に贈り物を持って行くし、招いた方も帰る時、贈り物をするが中国では必ずしもそういうことはしない」）と述べた。中国では誕生日など特別な日にだけ贈り物を持って行くとのことであった。

〔考 察〕

A1さんは日本に来る前、3ヶ月、40H ぐらい日本語を自習していたが、未習と同じなのでAクラスに参加した。中国では10年間銀行員をしており、御主人が三重大大学工学部に来たことから、後を追って日本に来たといういきさつがある。中国の人の場合、一人が日本に来ると、家族をよぶのは一般的であるようである。A1さんのおばさんが残留孤児であることも来日の理由になっているようである。

個別事例 I-A-①

このケースの被インタビュー者をA2さん（男性、35歳）とする。A2さんに対するインタビュー調査は、2000年3月7日の午後4時から5時まで1時間行われた。A2さんは、1999年10月10日、中国の南寧から来日し、生物資源学部の研究生となっている。中国ではK大学の助教授をしており、専門は応用数学である。

〔調査結果〕

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音では事件（じけん）（日）と“事件”（shìjiàn）（中）が同じ音のように思えるとき難しい。人間関係（日本語面での）については研究室の日本人（10人位）と少し話すことがあるとのことであった。

②生活上の問題点、困難点について。生活費については、国費留学生なので、奨学金を1ヶ月に18万円もらえる。それをあてているが、詳しいことは言いたくない。アルバイトはしていない。人間関係について。ア. 困ったときに相談する人は奥さん（日本語が上手である）である。イ. 日本人との関係では、日中友好協会のMさんを知っている。今まで3回会ったが、今後も会いたい。専門の勉強については、生物的、化学的実験は新しい分野のことなので、難しい。専門用語が難しいとのことであった。その他としてA2さんは今、和式のアパートにいたので、書斎、机がない、研究上、不都合だから、それらのあるアパートに移りたいとのことであった。

又、“日本人很注意时间，～”（「日本人は時間に厳しい」）、“问路时，日本人比较亲切。”（「道を聞くと、日本人は親切に教えてくれる」）、“日本人吃很多鱼，中国人经常吃猪肉。”（「日本人は魚をよく食べるが、中国人はブタ肉をよく食べる。」）等、日本で感じたことを話してくれた。

〔考 察〕

A2さんは、国費留学生として来日し、当時（2000年3月7日のインタビュー当時）、生物資源学部の研究生であった。三重大に来たのは以前、奥さんが留学生として在籍していたことにもよるようである。来日後、2ヶ月ほどで奥さんと娘さん（小学校3年生）を呼び寄せている。中国人留学生の場合、家族を呼び寄せるのは極めて一般的である。国費留学生であるから通常の中国人私費留学生のようにアルバイトと勉強の両立を計る必要はないケースである。

個別事例Ⅰ－A－㊟

このケースの被インタビュー者をA3さん（女性、29歳、私費留学生）とする。A3さんのインタビュー調査は2000年8月1日の午後4時から5時まで行われた。A3さんは2000年1月17日に新疆ウイグル自治区から日本にやって来て、インタビュー当時、人文学部の研究生であった。専門は農村経済である。中国では貿易関係の会社員をしていた。

〔調査結果〕

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音については、促音と長音のちがいが難しい。文法では動詞と名詞の区別が難しい。表現については書く（作文）のが難しい。日中語間の漢字の意味がちがうので。日本語を話す場の有無という意味での人間関係はあり、水曜日の午後2時40分から4時10分まで指導教授の紹介してくれたチューターと日本語で話す。しかし、できれば、もっと話す機会がほしい。

②生活上の問題点、困難点について。A3さんの御主人は生物資源学部のD2にいて、新聞（朝刊）配達のアパートをして1ヶ月8万円位の収入がある。それを生活費にあてている。

A3さん自身のアルバイトは以前、週3日、1日2.5時間から3時間、時給700円（税込）で豆腐を作る仕事をしていた。現在はしていないとのことである。人間関係について。ア. 困ったときに相談する人は今はいない。イ. 日本人との関係では指導教授、保証人を知っているが、特に問題はない。文化的摩擦は特にない。日本はスピードが早い、それは好きである。専門の勉強については今はしていない。まず日本語を上手にするようにと指導教授に言われたので。

〔考 察〕

A3さんは、新疆ウイグル自治区から来日した人である。小学校はモンゴル語だけで、中、高、師範学校では“漢語”（中国語）とモンゴル語の両方で勉強したとのことである。日本語学習についてははじめ、中国語版の文法説明書を持っておらず（英語はほとんどできない）、筆者の勧めで中国からとり寄せた。モンゴル語と“漢語”の二つの言語が理解できるから外国語学習には慣れているはずなのだが、日本語学習上は少し思慮に欠ける面が見受けられた。

個別事例Ⅰ－A－㊥

このケースの被インタビュー者をA4さん（男性、27歳、私費留学生）とする。A4さんに対するインタビュー調査は2000年8月3日の午前10時50分から12時10分まで行われた。A4さんは2000年4月1日に蘭州から来日し、インタビュー当時、教育学部の研究生であった。専門は数学教育である。中国では小学校の数学の教師をしていた。

〔調査結果〕

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音については濁音、破裂音が難しい。文法については、単独ではわかるが、会話などで応用するとき、難しい。たとえば受身表現については会話の中での習慣的使用法の基本がわかりにくい。

表現についてはまあまあ大丈夫とのことである。日本語を話す場の有無という意味での人間関係があるかということ、指導教授の紹介で週1回、水曜日か木曜日に1時間半、チューターと話す場があるとのことであった。

②生活上の問題点、困難点について。生活費は5～6万かかる。家賃等で10,600円かかる（内訳は留学生会館費4,100円、共益費2,000円、光熱費4,500円）。姉は医師で、その知り合いの日本人医師が今年度だけ月に8万円生活費をくれる。その人はA4さんの保証人である。アルバイトは中華料理店で1時間750円（税込）で週に12時間しており（清掃の仕事）、1ヶ月3万円位の収入になる。人間関係について。ア. 困ったときに相談する人は姉や中国人の友達である。イ. 日本人の知り合いは、日本人学生を3人位知っている。関係は良い。文化的摩擦は特に感じないが、地図を見る際、中国語では“隨着行走人的方向定左右”（歩いている人の方向によって左右を決める）が日本語では“用固定的方向定左右”（固定した方向で左右を決める）のが違いだと言うと述べた。つまり、日本語では鳥瞰的に上から地図を見て、「左（右）へ行く」と言うのに対して中国語では、歩

いている本人が「右へ移動する」なら「右へ行く」と言い「左へ移動する」なら「左へ行く」と言うのだそうである。文化の相違からくる言語表現の相違であろう。

〔考 察〕

A4さんは、中国ではK省教育学院(3年制)を卒業し、数学教師(小学校)をしていた。インタビュー当時、教育学部の研究生で専門は数学教育(既述)であるから、中国での専門と日本での専門が一致するケースである。中国人留学生の場合、中国での専門と日本での専門が異なる場合が多いことから考えると、むしろ特殊なケースなのであろうか。

個別事例Ⅰ-B

個別事例Ⅰ-B-㉞

このケースの被インタビュー者を仮にB1さん(女性23歳、私費留学生)とする。B1さんに対するインタビューは2000年3月6日の午前12時から12時50分まで行われた。B1さんは1999年10月1日に雲南から来日し、教育学部の研究生となっている。専門は教育方法である。B1さんは中国の大学を卒業後すぐ来日した。日本語集中コースBクラス(1999年10月2日～2000年3月1日既述)に参加した。(以下の㉟、㊱、㊲のケースも同じ。)

〔調査結果〕

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音については拗音(きゃ、きゅ、きょ)や濁音(ex. じゅんぴ)などが難しい。文法については、助詞の使い分けが難しく、受身と使役を混同することもある。表現については、受身と使役の使い分けが難しく、婉曲表現(好き嫌いについてはっきり表現しない等)も難しい。日本語を話す場の有無という意味での人間関係はあり、水曜日の午後2時40分から5時まで、留学生センターの花見教官の紹介によるチューターといろいろなことを話すとのことであった。又、日帰りのホームスティを今までに3回しているが、日本語を話すいい機会だったと思うと述べた。

②生活上の問題点、困難点について。生活費は仕送りの6～7万円をそれにあてている。アルバイトはしていない。人間関係について。ア. 困ったときに相談する人は義理の兄(医学部助手)や義理の姉である。イ. 日本人の知り合いはいない。文化的摩擦というほどではないが日中間の違いとして“送礼時日本人喜欢互相交换式, 而中国一般不习惯这样。在中国一般等很长时间才还礼。”(「プレゼントをするとき、日本人は互いに交換するのを

好むが、中国ではそういうことはない。中国ではお返しは長い時間が経ってからする。』ことが挙げられるとのことであった。**専門の勉強**について。専門の授業の日本語がよくわからないと述べた。

〔考 察〕

B1さんは大学卒業後、すぐ来日したこと、又、一人での生活ははじめてなので、“寂莫”（「さびしさ」）“空虚”（「虚しさ」）を感じることもあると言った。中国語をそのまま日本語に直訳すれば事足りるといった面があることから、日本語の力がそれほどついていない感もある（インタビュー1年後の筆者の印象）。語学学习上、年齢的には非常に有利な立場にいたのであるが、第1ハードルの日本語を乗り越えられないと、第2ハードルの専門へ行き着くこともできない。そうならないよう、筆者としてはよりよい日本語の授業を行うよう努めることしかできなかった。

個別事例Ⅰ－B－①

このケースの被インタビュー者の名をB2さん（女性、30歳、私費留学生）とする。B2さんに対するインタビューは2000年3月6日の午後1時から2時まで行われた。B2さんは1999年10月4日、北京から来日し、生物資源学部の研究生となっている。専門は水産経済である。

〔調査結果〕

①**日本語学习上の問題点、困難点**について。**発音**については関西弁、名古屋弁などの方言が実際、聞く場合には多いので聞き取りにくい。**表現**については敬語が難しい。（ex. Y先生が授業中、「いい？」と言ったので「いい」と答えたら、すごい目でにらまれた。）**日本語を話す場の有無**という意味での**人間関係**は以前あった。木曜日の午後1時から3時までチューターと話していた。（しかし、チューターがI県なまりが強すぎて発音がわからないので今はやめているとのことであった。）

②**生活上の問題点、困難点**について。**生活費**は1ヶ月に6～7万かかる。文部省の奨学金（1ヶ月）7万円（1999年10月～2000年3月）とアルバイト（レストランの案内係で週1回、3時間、時給900円、合計1万円）収入を生活費にあてている。また、中国から持ってきた貯金を授業料にあてている。**人間関係**について。**ア. 困ったときに相談する人**は中国人の友達（“同班同学”＝「クラスメート」）である。**イ. 日本人の知り合い**として

は保証人と今まで2回行ったことのあるホームスティの家族(以後つきあいなし)がいる。又、その他に日中友好協会にB2さんの父親の友人がいるので1ヶ月に1、2回会う。**文化的摩擦等**は特にない。**その他、諸々の事柄**として“中国的教育体制与日本の不一样。近二十年的应试教育使得中国的学生习惯了被动学习,而日本的素质教育与中国学生来讲,稍稍困难了些,但是,慢慢会习惯的。”(「中国の教育体制は日本と違う。この20年来の試験のための教育は中国の学生を受身にした。日本の個性を伸ばす教育は中国人学生には難しくもあるが、だんだん慣れていくと思う。」)と日本の教育についての印象を述べた。

[考 察]

B2さんは日本の“素质教育”(＝個性を伸ばす教育)に満足しているようである。中国ではコンピューター関係の教師をしていた。日本での専門は水産経済であるが、コンピューターを使う専門であると言うから、中国の専門と関係があるということになるであろう。B2さんのケースは比較的、日本によくなじんでいるケースであると思う。(奨学金をもっていたことも有利だと思う。)

個別事例Ⅰ-B-㊦

このケースの被インタビュー者をB3さん(女性30歳、交換留学生)とする。B3さんに対するインタビューは2000年3月6日の午後2時25分から3時40分まで行われた。B3さんは1999年10月8日に鎮江市から来日し、交換留学生として人文学部で会計学を勉強している。

[調査結果]

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音については長音／短音のちがい、促音が難しい。文法では敬語の使い方が難しい。又、使役はいつ使うかわからない。動詞等の変化が重なる句は難しい。表現については、日本語の婉曲表現が時々、意味がわからない。日本語を話す場の有無としての人間関係はあり、火曜、水曜の午後各1時間半位、日本語のボランティア(大学1、2年生)と話す。日本語で雑談をするのが役に立っている。

②生活上の問題点、困難点について。生活費は1ヶ月8万円位で交換留学生費をあてている。アルバイトはしていない。人間関係について。ア. 困ったときに相談する人は中国人の友人である。イ. 日本人との関係では1回ホームスティをしたその家族を知っていることと春節(旧正月)の祭りで久居市で台湾ダンスをして日本人と交流したことがあるこ

とを挙げた。**文化的摩擦**は特にない。

専門の勉強については次のように述べた。“指导老师今年一月对我说，“现在你的日语很差，不能够学习专业”，但我来日本并不是只学习日语，重要的是专业知识的学习，所以有一点不满意。”

（「指導する先生が今年 1 月、私にこう言った。「今のあなたの日本語能力では専門の勉強は無理です。」しかし、私が日本に来たのは日本語を勉強するためだけではなく、大切なのは専門知識の学習です。だから少し不満です。」）しかし、4 月から指導する先生の授業に出ることになっているので大丈夫だと思うと B3 さんは述べた。

〔考 察〕

B3 さんは中国の大学で会計学の先生（講師）をしていたが、来日時、日本語能力は高くなく、中国で少し自習したという程度であったから、日本語集中コース B クラスに参加したのであるが、専門の講義を聞いて理解するには初級修了程度の日本語力では当然不十分であった。文科系の専門の場合、かなり高度な日本語力（とりわけ、日本語の専門書を読まなければならない場合）を要求されることが多い。今後、何らかのケアを考えていく必要のあるケースである。

個別事例 I - B - ㊦

このケースの被インタビュー者を B4 さん（男性、28 歳、私費留学生）とする。B4 さんに対するインタビューは 2000 年 3 月 7 日午後 1 時から午後 2 時 30 分まで行われた。B4 さんは 1999 年 5 月 23 日に長春から来日し、人文学部の研究生となっている。専門は国際法である。

〔調査結果〕

①日本語学習上の問題点、困難点について。発音については「回」の「かい」を「かえ」とよくまちがえる。「間」の「かん」が「がん」に聞こえる。文法については、動詞、形容詞の接続、複雑な接続が難しい。表現について。婉曲表現は日本語だけに特殊なものではなく中国語にもある。（例：“请帮我一个忙。”（「助けて下さい」）は直接的表現であるが“你有时间吗？能帮我一个忙吗？”（「時間ありますか。助けて下さいませんか。」）は間接的表現である。）日本語を話す場の有無としての人間関係はあり、水曜日の午後 1 時から 4 時か 5 時まで日本語ボランティアと雑談する。

①生活上の問題点、困難点について。生活費は6万円位かかる。アルバイトは工場で車の部品の検査、修正をしており、時給1,200円(税込)で週に16時間、月64時間働く。月収は70,000円位になる。人間関係について。ア. 困ったときに相談する人は中国人の友達である。イ. 日本人の知り合いは、アルバイト先の日本人がいて仲がよく、よく話をする。文化的摩擦については、(日本人と中国人は)似ているので特に問題はない。しかし、ことばの使い分けが上司/部下、先輩/後輩の間で厳しいと思うと述べた。(“在和地位高或年岁大的人说话的时候, 中国和日本一样经常使用一些敬语(例如: 您, 请等等)。但在这方面, 日本则表现的似乎更严格。比如工作上一个人出现了问题, 在日本出了问题的人只有站直身体, 听着领导的训斥, 而同样的事情, 在中国出了问题的人是能够, 也敢于自己辨解的。” = 「地位や年齢が上の人と話すときは、中国でも日本と同様、敬語を使う。しかし、日本の方が上下の差はきびしいように思う。たとえば仕事でミスを犯した場合、日本では口ごたえは許されず、上司の言うことを聞くだけだが、中国では自分のことを弁護してもよく、あえてそうすることもある。」)

〔考 察〕

B4さんは、アルバイト先の工場の日本人と仲良く仕事をし、つきあっているようである。アルバイトをせざるを得ない私費中国人留学生の中では比較的、状況のよいケースであると思う。それは本人の人柄にもよるのではないかと思う。

三、全体的考察

以上、個別事例I-A(I-A-㉗、I-A-㉘、I-A-㉙、I-A-㉚) 個別事例I-B(I-B-㉗、I-B-㉘、I-B-㉙、I-B-㉚) 合計8ケースについて主要なインタビュー結果を記述し、個別的考察を行ってきたが、ここでは項目別の特徴についてより全体的、鳥瞰的に考察していくことにする。

まず①日本語学習上の問題点、困難点について。

発音については、促音と長音のちがい、音が似ている単語(ex. 事件(じけん)/事件(shìjiàn)、濁音、破裂音、拗音、短音が難しいという一般的困難点の他に方言(関西弁、名古屋弁)の難しさ(B2)を挙げる者がいた。

文法については、大丈夫と言う者(A1、A2、B2)と、会話での応用、助詞、受身と使役の使い分け、敬語、形の変化(=接続)が難しいと言う者に分かれた。前回の事例研究(I)でも2つのグループに分かれたから興味深い調査結果である。

表現については「なる」の表現の多さ、作文、受身表現と使役表現の使い方、婉曲表現、

敬語表現の実際上の使い方が、難しいということであった。婉曲表現については、B1、B3の2名が挙げており「好きなことをはっきり言わない」(B1)「時々、意味がわからない」(B3)としている。しかし、「婉曲表現は日本語だけに特殊な表現ではないと思う。中国語にもある。」(B4)という者もあり、問題は表現上の習慣の違い(質と量の両面での)を明晰に認識しているかどうかなのかもしれない。作文が難しいと言った(A3)のは、漢字の意味が日本語と中国語でちがうために生じる困難点であるとのことであった。日本語と中国語の漢字の意味のちがいは語レベルで明確にしていけないと意味不明な日本語の産出につながる。今後初級レベルでの漢字の意味のちがいからレベル別に明確なものにしていくことも必要であろう。

日本語を話す場の有無という意味での人間関係については、おおむね週に1回、1時間半ぐらいはチューターや日本語ボランティアと日本語で話す場がある。留学生センターの教官、各学部の留学生専門教育担当教官、指導教授が日本語を話す場を留学生に提供するため尽力していることがうかがい知れる。

②生活上の問題点、困難点について。

生活費について。大略 ㊦5万円から7万円と言う者(A4、B1、B2、B4)、㊧8万円から10万円と言う者(A1、A3、B3)、㊨言いたくないと言う者(A2)の3つのグループに分かれた。㊦のグループの月收入は、保証人(医者)の生活援助(今年度1年間月8万円)+アルバイト(月3万)(=月11万円)(A4)、仕送り(月6~7万円)(B1)、文部省の奨励金7万+アルバイト(1、2万)(=計8~9万円)(B2)、アルバイト(月7万位)(B4)であり、㊧のグループの月收入は中国から持ってきた貯金+アルバイト(=計月8~10万)(A1)、御主人のアルバイト(月8万)(A3)、交換留学生費(月8万)(B3)であった。また、㊨の生活費を言いたくないと言う者(A2)の月收入は国費留学生の奨学金としての18万であった。

アルバイトについては、㊦単純労働(ex. 食品陳列、清掃、食品加工)で時給700円~750円(税込み、又は手取り)、週10時間程度働いて月に3万弱位の収入を得ている者(A1、A3、A4)、又㊧レストランの案内係で時給900円、週1回3時間で月に1万位収入を得ている者(B2)、㊨工場で車の部品検査等をし、時給1,200円(税込)で週16時間働き、月に7万円位収入のある者と職種別におおむね3つのグループに分かれるようである。日本語が未熟で、特に専門性がない場合には、単純労働をするしかないのが中国人私費留学生の実情である。

人間関係について。ア. 困ったときに相談する相手は配偶者や親戚、中国人の友達であり、イ. 日本人の知り合いには日中友好協会の人、保証人、アルバイト先の日本人がいる

とのことであった。

文化的摩擦については、他人の家を訪問するとき、いつも贈り物を持っていく日本とふだんは持っていない中国のちがい（A 1）、贈り物の返礼をすぐする日本と長い間経ってから返礼する中国のちがい（B 1）を挙げる者、地図の方向を鳥瞰的に見る日本と歩行者の観点から見る中国のちがい（A 4）を挙げる者がいたが文化的摩擦というほどのものではなく、単なる文化的相違であろう。

専門の勉強については、今は日本語の勉強を中心にしているのではほとんどしていないと言う者（A 3、A 4、B 3、B 4）が半数を占めた。その他の者は日本語能力の未熟さによって専門の勉強にも難しさを感じているようであった。その傾向は文科系の専門の者ほど大きい。

その他、**諸々の事柄**としては、道を尋ねると親切に日本人は教えてくれる（A 2）、日本はスピードが何でも早い、それは好きである（A 3）、日本語だけでなく専門の勉強も同時期にしたかった（B 3）、中国とちがって日本では理由が正しくても上司の言うことに逆らうのは基本的に許されない（B 4）などの意見が述べられた。

以上、項目別に鳥瞰的、全体的考察を行ってきたが中国人私費留学生の場合、生活費（月あたり）が㊦5～7万円㊧8～10万円というのが実情である。（もちろん国費留学生として18万円の奨学金を得ている者もいるが少数である。）前回の事例研究（Ⅰ）でもそうしたケースが多かった。

交換留学生（B 3）は月8万円の奨学金をもらい、留学生会館に住んでいるから、まだよいが、中国人私費留学生の場合、アルバイトと勉強の両立が一番の課題となる。更に日本人学生との年齢差（中国人私費留学生の大半は中国で大学を卒業してきている）もあり、「孤立」する条件には事欠かないというのが現実である。中国人私費留学生の日本についての印象が悪くないのが救いであるが、今後、どうなっていくか、予断は許されない。中国語を理解し、日本語と中国語の両言語を教えている者として何らかの手立ては講じたい。そのためにも、今後更に事例研究を拡大し深化していくことの必要性を痛感する次第である。⁽⁷⁾

【注】

- (1) 平成11年度三重大学教育研究内容等改善経費による研究プロジェクト報告書、研究代表者花見楨子（2000）『留学生と日本人学生の交流活動推進のための研究』所収の拙稿 pp. 65－79
- (2) 三重大学留学生センター 1999年度『日本語授業案内』後期用 p. 15
- (3) 同（2）p. 7

(4) 同 (2) p. 7

(5) 同 (2) p. 7

(6) 同 (2) p. 12

(7) なお、生活費については自己申告的なものであるから実態把握には必ずしもならないという批判もあるであろうが、調査自体に意味があると筆者は考える。従来、中国人私費留学生の生活費について三重大学でインタビュー調査を行っていたとは言えないのではないだろうか。

参考文献

箕浦康子編著 (1999) 『フィールドワークの技法と実際－マイクロ・エスノグラフィー 入門－』
ミネルヴァ書房

京都大学留学生研究会 (編) 『ライフ・イベント語られる留学－京都大学に学ぶ 6 人の留学生－』
(1999)

江河海著佐藤嘉江子訳『中国人の面子』(2000) はまの出版

田島英一『「中国人」という生き方』(2001) 集英社 集英社新書

園田茂人『中国人の心理と行動』(2001) 日本放送出版協会 NHK ブックス

添付資料

(インタビューシート)

－ 中国語を母語とする日本語学習者の日本での日本語学習上及び生活上の問題点、困難点についてのインタビュー調査 －

インタビュー年月日 _____年 _____月 _____日
午前／午後 時 分～ 時 分

被インタビュー者

姓 名 _____ 男／女 年齢 才

来日時期 _____

国 籍 _____ 現在の身分 _____
(専門) _____

日本語力 _____

①日本語学習上の問題点、困難点

・発音

・文法

・表現

・人間関係(日本語を話す場の有無等)

②生活上の問題点、困難点

・生活費

・アルバイト（職種・時間）

・人間関係

ア. 困ったときに相談する人

イ. 日本人との関係（知り合いの有無・知り合いとの関係の良好度）

ウ. その他

・文化的摩擦（日本と中国の文化、習慣上の相違／日本で困ったことの具体例）

・専門の勉強について（学習上の困難点）

・その他、諸々の事柄
